高齢者研究の現場としての日本認知科学会
Japanese Cognitive Science Society as a field of research on aging and vitality

小橋 康章[†]，齋藤 洋典[‡]
Yasuaki Kobashi, Hirofumi Saito
[†]株式会社大化社，[‡]中部大学
Taikasha,Co.Ltd., Chubu University
kobashi@taikasha.com, saito@isc.chubu.ac.jp

概要
高齢者研究の可能性を探るうちに気づかされた、正解のない問題にいかに対処するかという難問（メタ問題）を紹介し、研究者コミュニティとしての日本認知科学会内外における高齢研究者や未来の高齢研究者との問題意識の共有を訴える。

キーワード：JCSS, 認知科学(cognitive science), 超々高齢社会(hyper-aging society), 研究者コミュニティ(research community), 高齢者研究(gerontology), 野外科学(field science)

０．はじめに
齋藤と小橋は高齢者研究の可能性(小橋，2015)を探っているうちに正解のない問題にいかに対処するかという難問(メタ問題)に気づかされた。

高齢者研究とは（超々）高齢者社会における高齢者個人や社会、それらの関わりに「ついて」の研究であるか、それらの抱える問題を解決する「ための」研究であるとする。

またときに高齢者研究とは高齢者による研究でもあり。少なくとも研究者共同体の一部に高齢者がいることによってはじめて可能になる研究といったニュアンスも含んでいる。情報化と超々高齢化が進行する社会を背景に、自分自身が高齢化する認知科学研究者が、若年者とどう関わりつつ、例えば認知症患者の幸福とはなにかといった、「正解のない問題」にアプローチできるかを考えたい。

ここでは齋藤が体験した「正解のある課題のみを要求する学生」との遭遇と、ふとした故障から一週間の「安静入院」をすることになった小橋が「痛み」についてあれこれ考えることになったエピソードをもとに、認知科学会はどのような難問に取り組むべきか、またそれはいかにして可能かといった問題に答えたい。無論この問題はそれ自身がメタ難問であって、非常に大きくその全部が見えてすらいない。我々が試みるのは氷山の一角を示すことに過ぎない。

１．正解のない問題に対処する意義
齋藤は大学での授業の中で正解のある課題の提示、あるいは正解のある質問をしてほしいという学生に再三出会い、違和感をもっていた。大学生は研究者共同体の正統的周辺参加者であり、研究は多くの場合正解が（まだ）ない問題の答を探る活動である以上、正解のある問題に正解を出す練習ばかりをしていたのでは授業にならない。また正解のある問題を提示し答え合わせを最適な順序で行う作業は機械でもできる。「機械」とはコンピュータ、プログラム、人工知能、あるいはプログラム化された人間の総称的比喩である。この問題については齋藤(2019)が詳細に議論している。

例えば個人をめぐる生と死のありようについての正解はないが、従来の認識は根底から改める必要があるとして、高齢化社会の誕生とは別にその問題は生まれていたのかも知れないが、私たちが直視することを避けていたか、あるいは個人に閉じた問題だと思い込もうとしていただけかも知れないとし、高齢化社会の特徴は、難問を難問としてではなく普通の問題としてみんなで考える機会を私たちに提供しようとしていると結論付けている。

２．痛みに対処する
小橋は現在68歳であるが2019年4月後半にちょっとした不注意から生まれて初めて「ぎっくり腰」を患い、いくつかの経緯を経て1週間の安静入院を体験することになった。入院も生まれて初めてである。この間、様々な痛みを経験しそれらについて思いを巡らす機会を得た。

まず痛みには、歯の痛み、腰の痛みといった部位や原因を特定できるものもあるが、内臓など身体の深部の痛みや、いわゆる心の痛みのように、部位や原因を特定しがたい痛みも存在する。

そして痛みに対処する方法としては、耐えるか、止めるか、原因を取り除くかしか対処の方法がないように思われる。

痛みに耐えることを美徳とする文化は存在するが、痛みが身体の発する異常事態の危険信号であるとするなら放置することは出来ないし、痛みが続けば注意力が失なわれたり身体の自動的な補償行動によって別な部位に異常が広がりかねない。

現代医学は鎮痛薬をはじめ痛みを止める方法を工夫してきた。痛みはないほうが良いという常識的な考えに従えばこれは歓迎すべきことだが、その痛みの伝達しようとしている情報を無視することに繋がりかねず、また副作用も無視できない。

痛みの原因を取り除くことが理想的ではあるが、原因や対策がすべてのケースについて存在しているわけではない。そこに研究の余地があるということになる。

生まれて初めての「ぎっくり腰」の痛みの特徴は、キリキリとかズンズンとかいった擬態語で表現されるようなクオリア面ではなく、姿勢の変更に応じた増減や耐えようとする努力への反応といったダイナミックな面にあった。そこでは痛みは行為のマーカーであり、あることをすれば増え、別なことをすれば減少する。しかもそれらの行為の多くは無意識的なものであるため、痛みは普段無意識に行っている行為への意識を高める機能もある。例えば単に椅子に座っているという行為が床に横になっているという行為に比べてはるかに自動的な調整運動を必要とし、従って痛みに繋がりやすいということも感じ取ることが出来る。またベッドの背を上げたり下げたりするボタンスイッチを自分で操作するのと他人に操作されるのでは、前者の方がはるかに耐えやすいこともわかる。これらの知見がどのくらい普遍的なものかはまだ明らかでないが、様々な人が様々な痛みの体験を共有するデータベースなりSNS のようなものが存在すれば、もう少し大きな像が見えてくるだろう。

痛みの体験は別の痛みの体験の連想を呼び、数年前に尿路結石を患ったことを思い出した。入院に至るほどのことではないが、この痛みの特徴は部位が特定できず、従って原因も推定できず、さらには経過の予測がつかないことだった。こうした性質は不安感につながる。医師の診断によって病名が確定し、さらにはウェブ検索で尿路結石の原因や痛みの性質、他人の体験談などを知ることが出来たとき、この不安が目に見えて減ったことをいまでもはっきりと憶えている。

興味深いことにどちらの場合も周囲の人々に痛みの体験を話すとそれまで聴かされたことのなかった他人の痛みの情報を得ることができた。痛みを訴えることに対してはスティグマが存在するようで、多くの人はその体験を自分自身の知識に留めているのであろう。たしかに痛みは愉快な体験ではなく、それについて聴かされ続けるのはインスタグラムで美しい風景や美味しそうな料理の写真を見せられることとは違うであろう。しかしそれを必要としている人には痛みの情報が大きな助けになるのも間違いない。この結論は仮説にとどめておくが、より広範な研究に値するテーマではないだろうか。

３．エピソードの解釈と結論

高齢者研究の可能性を探る際、（1）何を研究するのか、という問いと（2）どう研究するのか、という問いが当然ある。これらのエピソードから推定されるのは、まず（1）「何を」の問いには、わかっていることをより精緻に、より普遍性のある知識にという方向だけでなく、「気になる」「なんとかならないか」「面白そう」といった、問題意識と現場での観察や気づきに導かれて生成される仮説が重要なことである。

また（2）「どう研究するのか」についても、仮説に導かれて検証に至る、推論や実験に基づいた広く受け入れられた方法のほか、 問題意識、観察、気づきから仮説生成に至るプロセスを定式化した野外科学的方法（川喜田，1973）の認知が求められていること、また野外科学的方法のデータとなる質的な記述の発表や流通を促進することの必要性、これらが推定される。

日本認知科学会も社会の超々高齢化の波の中にあり、創立時の会員も多くが高齢者となっている。ある人は定年とともに研究から遠ざかり、ある人は過去の貢献によって敬意をもって遇されるものの現場からは遠ざかる。それでも個人のブログや学会発表などを通じての貢献を続ける人も居り、情報通信技術やそれを活用した知識や情報の共有の文化は研究を続ける上での大きな助けになるポテンシャルを秘めている。高齢化と情報化の進展する社会にあって、例えば認知症になった親の幸福を子としてはどう考えたらよいか、言ってもわかってくれない相手にどう対処したらよいかとい

った、認知科学の中でもこれまで全く触れられていなかった問題が生じる。こうした問題は認知科学研究者自身の身にも降りかかっており、通常の、あるいはこれまで常識とされてきた研究や学会活動を困難にする一方、研究や認知的な活動一般への今までになかったアプローチを追求する新たな動機づけと機会を提供している。

高齢の研究者が研究者コミュニティにどう貢献できるかは今後極めて重要な問題になる。そこには経済的な問題も、体力的な問題も、また認知能力の衰えといった課題も山積しているが、どれも高齢研究者を消極的にではあれ排除する理由にはならないと考える。日本認知科学会がこうした新しい高齢者研究の可能性と価値を認識し、高齢研究者（を含むチーム）の研究活動を奨励し支援することを切望する。

参考文献

川喜田二郎（1973）『野外科学：思考と探検』. 中央公論社（中公新書）

小橋康章（2015）高齢者による高齢者のための高齢化研究の構想　日本認知科学会第 32 回大会予稿集, pp. 329-334

齋藤洋典（2019）正解のない問題に対処する方法を考える意義　この予稿集